精神保健医療福祉の今後の施策推進に関する検討会	
第４回（令和７年１月15日）	資料３

第4回精神保健医療福祉の今後の施策推進における検討会

日時：2025年1月15日（水）　14：00_17：00
場所：航空会館ビジネスフォーラム　大ホール

一般社団法人日本メンタルヘルスピアサポート専門員研修機構
理事補佐　丸山　絵理子

自己紹介

- 高校卒業後、就職
- 24歳　結婚　第一子出産
- 25歳　第二子出産
- 26歳　衰弱し始めて病院へ繋がる
- 32歳　福祉従事者として働き始める
- 35歳　日本メンタルヘルスピアサポート専門員研修機構との出会い

疾病・病院との関わり

- 8歳、 自殺未遂
- 26歳、初めて精神病院へ繋がる
- 27歳、自殺未遂
- 入院3回
- 約10年様々な治療を経て、通院終了

精神科医療における身体拘束を始めとする行動制限に頼らない治療を目指して
～医療従事者の方々への感謝～

- 時間をかけて丁寧に患者の気持ちや想いを汲み取る
（傾聴→受容→対話）
- 不穏が顕著な時こそ患者との丁寧な関わりや
十分な時間をかけた診療等を行うことが治療となる

第４回精神保健医療福祉の今後の施策推進に関する検討会

日時：2025年1月15日（水）　14:00-17:00

場所：航空会館ビジネスフォーラム 大ホール

内布智之

日本メンタルヘルスピアサポート専門員研修機構 副代表理事

氏名：内布 智之（うちぬの ともゆき）

- 20歳代中期にメンタルヘルスの不調が始まる
- 20歳代後期に幻覚妄想に苦しむ。精神医療に繋がり同じ境遇の仲間たちと出会う
- 30歳代初期に福祉のピアサポーターに雇用される
- 40歳代初期に日本メンタルヘルスピアサポート専門員研修機構を仲間たちと設立する
- 現在は一般企業に勤務しつつ障害者ピアサポート研修の普及に携わる

本日お話しする内容

- 精神病院　閉鎖病棟　保護室の体験
  - 本当に行動制限は医療の一環なのでしょうか？
  - 保護室にも暖かかな一筋の光があった
- 行動制限についての想い
- これからの行動制限ついて
- 最後に

日本メンタルヘルス
ピアサポート専門員研修機構とは

- わが国において、1990年代から作業所や社会復帰施設で、ピアサポーターが活躍するようになりました。一方、アメリカやカナダでは1980年代から（認定）ピアスペシャリストとして、雇用ガイドラインや研修プログラムが開発されています。

- 平成23年度から平成26年度にかけて、日本の各種専門家・ピアスタッフがマジゾン（アメリカ）への視察やトレーニングマニュアルの和訳などと研修プログラムの開発・実施を行う中で、基盤となる組織・団体が必要となり、精神障がい者ピアサポート専門員研修企画委員会で議論の末、平成27年4月1日に、一般社団法人を設立する事と成りました。

- 一般社団法人日本メンタルヘルスピアサポート専門員研修機構は、各種専門職と協働して、「リカバリー」を支援できる精神障がい者ピアサポート専門員を育成する事を目的としています。

（日本メンタルヘルスピアサポート専門員研修機構HPより）

● 精神病院 閉鎖病棟 保護室の体験

突然に自由を奪われた体験から

➢ 行動制限は本当に医療行為でしょうか？

- 保護室にも暖かな一筋の光があった

● 行動制限についての想い

➢強制的な治療で患者は無力感の中で心の傷をより深めるのです。

- 心の傷をより一層傷つけられることで医療では回復できないダメージを深く刻んでしまいます。

➢心身共に疲れた患者が「力（ちから）」で押さえ込まれている。

- 不穏多動は食べれず眠れずの中で孤独と恐怖のなかで力を振り絞り助けを求めていることが患者からのメッセージなんです。
- 根本は力と力で衝突するのではなく、心と心の対話で共鳴し合うことが患者と治療者との関係性を築いていく原点になると思います。
- 「時間がない」「人手がない」「スキルもない」を解決するのは治療の現場の問題ではなく、我が邦全体の課題なんです。

● これからの行動制限について

- まず実際の強制的治療の現場で起こっている人権侵害を確認する。
  - 本当に人命優先で行動制限をしているのか？
  - 保護室を懲罰房に使わない仕組みが必要。

- 拘束も隔離もゼロ。医療者からの心理的・身体的圧力もゼロへ
  - 拘束と隔離は医療環境が整っていないことの現れです。
  - 「患者が暴れるから」は逃げ言葉。
  - 医療者が治療環境への諦めを持っていたら患者は何を希望にすればいいのか？精神科の治療は絶望になった状況でも患者が再度希望を持てること。
- **『良質で適切な精神科医療を提供するための基本法』**の検討をお願いします。

● 最後に

私は今回のヒアリングで皆様へ伝えたかったことは精神科の医師が患者に行動制限をする治療を後世へ残したくないと思ったからです。

我が邦の次世代を生きる子供たちも精神疾患を持った時に絶望することもあるでしょう。その子供たちが希望につながる治療を受けて回復へ繋がるきっかけを得られれば再び希望は湧き、再度自分らしい人生を送ることが出来た時にはこの邦に生まれてきて良かったと想うはずです。私は過剰な薬物と一方的で強制した行動制限を無くして欲しいと切に願います。